

国立国語研究所学術情報リポジトリ

The function of the three sets of deictic terms :
Ko-, so-, a- in referring to physical space : A
sketch of the development of such studies from
1833 to the present and an experimental study

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高橋, 太郎, 鈴木, 美都代, TAKAHASHI, Tarō, SUZUKI, Mitsuyo メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001310

コ・ソ・アの指示領域について

高橋 太郎
鈴木 美都代

I	これまでの研究とのこされた問題	2
1.	これまでの研究	2
1.1.	佐久間説以前	2
1.2.	佐久間説	4
1.3.	佐久間説以後	5
2.	のこされた問題	8
2.1.	コソアドのあらわれかたの事実について	8
2.2.	コソアドのなわばりのとらえかたについて	9
2.3.	コレ、ココ、コッチのちがいや、さすもののカテゴリーのちがいについて	9
2.4.	さしめし行動の形態について	9
II	実験	10
1.	実験の目的	10
2.	実験イ	10
2.1.	実験の方法	10
2.2.	実験の結果, 考察	13
2.2.1.	結果のまとめかた	13
2.2.2.	結果の図の解釈	18
2.2.3.	考察	20
3.	実験ロ	21
3.1.	実験の方法	21
3.1.1.	第1セット「みてください」(4組×1)	22
3.1.2.	第2セット「だれのふでばこ」(3組×3)	22
3.1.3.	第3セット「どうしてください」(3組×3)	22
3.2.	実験の結果, 考察	22
3.2.1.	第1セット「みてください」(4組×1)	22
3.2.2.	第2セット「だれのふでばこ」(3組×3)	23
3.2.3.	第3セット「どうしてください」(3組×3)	25
3.2.4.	三種の実験をとおして	26

4. 結論	27
Ⅲ 文献	30
1. コソアドの記述についての文献一覧表 (1833~1941)	30
2. コソアド関係研究文献 (1833~1980)	37
付記	42

I これまでの研究とのこされた問題

1. これまでの研究

コソアの指示領域については、古くから (a) コソアを話し手から対象までの距離によって性格づけるとらえかたと、(b)話し手ときき手のなわばり関係によって性格づけるとらえかたの二つがあった。

(a)は (b) よりも前からあり、近称・中称・遠称という用語とともに、ひろくしられているが、現在ではむしろ(b)への評価が高い。

私たちの研究をすすめるにあたって、この兩者にかかわるこれまでの研究のながれをながめてみたので、最初に、それを報告する。ここでは(b)のとらえかたで代表的な佐久間鼎 (1936)『現代日本語の表現と語法』がでたころを念頭におき、戦前までとそれ以後とにわけて、そのながれをスケッチすることにする。

1.1. 佐久間説以前

戦前までのいろいろな研究文献のうち、見ることのできたものを、Ⅲの1の表にまとめた。これはコソアの指示領域のとらえかたについて、つぎの三種類のどれであるかをわかるようにした一覧表である。

(a)コソアを話し手から対象までの距離によってとらえたもの (H)

(b)コソアを話し手ときき手のなわばり関係によってとらえたもの

(H-K)

(c)その他 (他)

(c)のその他は、(a)でも(b)でもない第三のもの、(a)か(b)かはっきりしないもの、コソアの区別だけをしめしてあるものなどをふくむ。

この表では、用語の観点もいれておく。なぜなら近称・中称・遠称という用語は、話し手から対象までの距離によってとらえる場合だけではなく、話し手、きき手のなわばり関係としてとらえる場合にもつかわれることがあるし、また、(a)、(b)どちらの場合についても、ほかの用語がつかわれることもあるからである。

Ⅲの1の表から、つぎのようなことがいえる。

まず、話し手から対象までの距離によるとらえかた(a)では、近称・中称・遠称という用語が、大槻文彦(1898)「語法指南」(『言海』の巻頭、初版は1889)ではじめてつかわれたことがわかる。他の用語としては、物集高見(1890)『初学日本文典』が、コ・ソ・アをそれぞれ第一等・第二等・第三等と名づけており、また、岡倉由三郎(1897)『日本文典大綱』が近位・中位・遠位、前波仲尾(1901)『日本語典』が近称・遠称・不定称という用語をつかっている。

(a)でつかわれる「近称」は、話し手に近いものをさすのに用いられ、「中称」は、ややはなれたもの、「遠称」は、遠いものをさすのに用いられる。大槻文彦はじめ、飯田永夫(1891)、落合直文(1899)、杉敏介(1900)、三土忠造(1903)、金沢庄三郎(1903)、岡田正美(1905)、吉岡郷甫(1906)、保科孝一(1911)、和田万吉(1926)らがこの用語をつかっている。なお文部省(1941)もこの(a)のとらえかたによっている。

(b)のとらえかたの代表として佐久間鼎(1936)『現代日本語の表現と語法』があげられるのだが、それより前に松下大三郎『日本俗語文典』、草野清民『草野氏日本文法』(どちらも1901)、山田孝雄(1908)『日本文法論』、安田喜代門(1928)『国語法概説』、湯沢幸吉郎(1931)『解説日本文法』らによっても、話し手、きき手のなわばり関係としてとらえられていた。

用語は、草野が第一称・第二称・第三称と名づけたほかは、従来の近称・中称・遠称をつかっている。松下は1901では近称(近主称)・中称(近客称)・遠称と名づけているが、1930では第一近称・第二近称・遠称と名づけている。

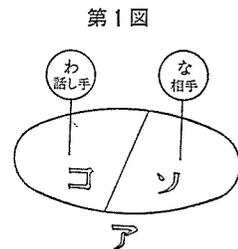
(b)での「近称」は、話し手に近いものをさすのに用い、「中称」は、きき手に近いものをさすのに、「遠称」はどちらからも遠いもの、あるいは話し手、きき手のどちらにも近いか親しいかの関係をはなれてさすのに用いられる。松下よりも前に、用語はないが、落合直文・小中村義象(1904)『中等教育日本文典』(初版1890)など、きき手との関係および遠近を考慮にいられているものがある。なお、アストン(1888)『日本口語小文典』(第4版)も、コレは第一人称、ソレは第二人称、アレは第三人称のものにとらえていて、ソレは話し手の眼前にあるもの、または記憶にあるものという説明があり、(c)その他の欄にある高津鋏三郎(1892)『日本中文典』への影響をおもわせる。

(c)その他には、上にのべた落合直文・小中村義象、高津鋏三郎らのほかに、コ・ソ・アを自称・他称・別称と名づけた金井保三(1901)『日本俗語文典』、近位・中位・遠位と名づけた鈴木暢幸(1906)『日本口語文典』などがある。

1.2. 佐久間説

佐久間鼎は『現代日本語の表現と語法』(旧版1936, 増補版1951)で指す語を一括して「コソアド」と名づけた。「増補版」(1951)では、指示の場と指す語を、つぎのように、図を示しながら説明しているので、すこし長いが引用する。

話し手とその相手との相対して立つところに、現実のはなしの場ができます。その場は、まず話し手と相手との両極によって分節して、いわば「なわばり」ができ、その分界も自然にきまってくる。前にのべたように「これ」は話し手自身の勢力範囲に属します。はなし手というかわりに、「われ」の「わ」を名としてこれを「わのなわばり」といってもいいわけです。これに対して、「それ」は相手の勢力範囲の中のものさしていうので、「なれ」の「な」をとって「なのなわばり」に属しているということが出来ます。そこで、前者は「ここ」に当り、後者は「そこ」に当るという関係になります。これをそれぞれ(コ)と(ソ)で代表させますと、それ以外の範囲はすべて(ア)に属します。「こちら・こっち」と



「そちら・そっち」と「あちら・あっち」との関係も、この「わ」—「な」の対立の現場の事態に徴して意味をもつわけです。

以上のように、近称・中称・遠称の別は、話し手から対象までの距離の遠近によるものではなく、人称代名詞の人称と関連させて考えなければならないものであるとした。

1.3. 佐久間説以後

コソアの指示領域について佐久間に代表されるとらえかた——話し手、きき手のなわばり関係というとらえかた——があらわれてからコソアド研究が大きく進展してきた。

しかし、戦後にでてきたものは佐久間説を基本的にはみとめながらも、特にソ系のでかた（話し手ときき手がむかいあっているとき、話し手のうしろのものをソ系であらわすような場合）がきっかけになって、いくつかの部分の修正をくわえている。それらのうちのおもなものを年代順に紹介しよう。

渡辺実 (1952) 「指示の言葉」

渡辺 (1952) は、コソアのなわばりについてつぎのようにのべている。

「こ」や「そ」の場合の縄ばりを、話し手又は聞き手へ求心的に強い力で張られたもの、と評することが出来るとすれば、「あ」の場合の縄ばりは話し手・聞き手両者を中心とした、弱い縄ばりだと評してよい。次に甲乙兩人は向いあっていないということが、場面構造の第二の条件となる。「そ」が向いあいの場面での指示の言葉であり、「こ」が向いあい、並びあい、両様の場面での指示の言葉であったのに対して、「あ」は並びあいの場面での指示の言葉なのである。

そして、話し手、きき手のむきかたによるコソアのちがいを実験によってしめた。

高橋太郎 (1956) 「場と場面」

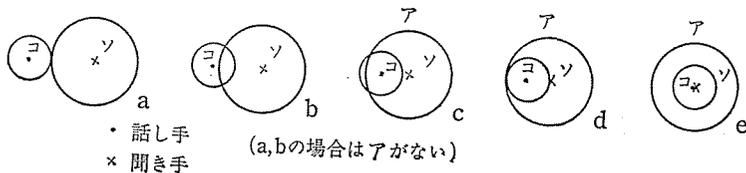
高橋 (1956) は、やはり実験・調査の結果をもとに、つぎのように佐久間説に修正・補足が必要であることをのべた。(なお、この高橋は、この研究の筆者のひとりである。)

- (1) A系は、話し手と相手とが接近したときのみ、あらわれること。
- (2) 話し手と相手が接近したときには、話し手のうしろにもソ系があらわ

れること。

これは、わのなわばり(コ)は、なのなわばり(ソ)よりちいさいので、話し手がき手に接近するにつれて、日食のように、なのなわばりのなかへはいつていくかたちになるのだとして、つぎの第2図をしめた。

第2図



このようにして、話し手と聞き手がおなじ位置にきたばあい(e)は、佐久間説と近称・遠称説とが完全に一致することになる。ふつうの会話は、eに近い位置でおこなわれるので、近称・中称・遠称というとらえかたで、たいてい説明できる。なお、ア系は、話し手と聞き手が接近したばあい、つまり、話し手のうしろにソ系がでるようなばあい(c, d, eの図)になってはじめてあらわれる。

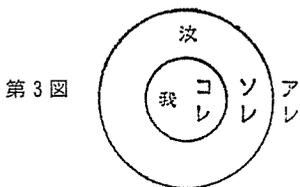
(引用の部分は高橋 (1975) 『言語生活』 No. 280から)

そして、さらに、コ・ソの対立とコ・アの対立の総合として、コ・ソ・アという鼎立が生じるとのべた。

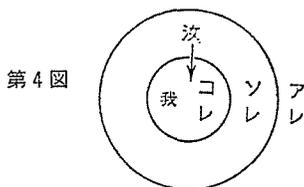
服部四郎 (1961) 「コレ」「ソレ」「アレ」と this, that」

服部は『世界言語概説』(1952)では、「話し手からも相手からもやや離れたものをソレという場合の説明に困る」から従来の近称・中称・遠称の説がいいとのべるが、のちに『英語青年』(1961)の「コレ」「ソレ」「アレ」と this, that」は、従来の二通りのとらえかた——近称・中称・遠称説といわゆる佐久間説——で説明できない場合の例をあげた。

たとえば、二人でむかいあって話している場合に、話し手が自分のうしろ



第3図



第4図

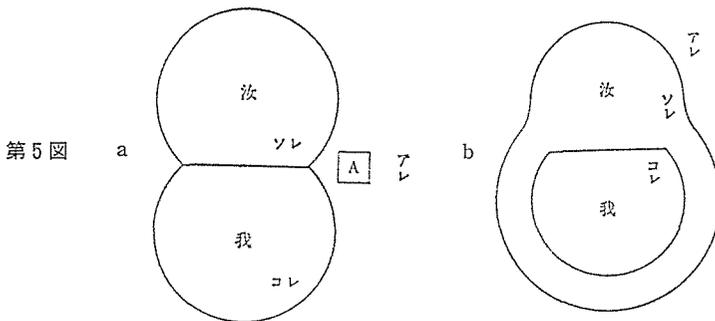
にあるものを指して「ソレ」ということがあるとして、これらすべての場合に
あてはまるように第3図のような構造を考えた。

そして、この「汝」は「コレ」の範囲内にはいつてくる場合もあるよ
うだから、第4図のようにでもしたらいいかもしれないとのべた。

その後、宮田幸一が同じく『英語青年』(1961)の「日本語と英語の指示
詞」——服部四郎氏の考察を読んで——の中で服部説に反対をと
なえた。

それは、「話し手が自分のうしろにあるものをさしてソレとい
うことは、たとえあるとしても、さほど一般的なことではない
のではないか」、「純粋な直接指示のための指示詞であるとし
たら、そういう場合のソレはかなり特殊なものであるよ
うに思われる」「話し手が前をむいたまま後ろにあるものを
コレ、またはアレといって指示することもあり、むしろその
ほうが一般的であるように思われる」として佐久間説で十分
説明できるというものであった。

それに対して、服部は『英語基礎語彙の研究』(1968)で、
コレ、ソレ、アレの指示領域は東京方言等と自分(三重県
亀山市出身)に近い方言とでは違っているとして、宮田説に
従った第5図(a)と自分の指示代名詞領域の第5図(b)をし
めし、話し手のうしろのものをさしてソレといわず、コレ
またはアレというのがふつうだという宮田説は東京方言に
あてはまるが自分の方言にはあてはまらないとのべた。



阪田雪子 (1971) 「指示語「コ・ソ・ア」の機能について」

阪田 (1971) は、やはり佐久間説によっては説明できない現象について検

討し、コ・ソ・アの指示機能をつぎのようにまとめている。

(1)話し手自身を中心として考え、話し手自身の領域の中にあるものと外にあるものに分ける。すなわち、話し手は空間的・心理的に身近なものは自己の領域内のものと認め、コ系で指示し、自己の領域外のものとしたものをソ系で指示する。(筆者注：阪田は、イ. 現場指示、ロ. 文脈指示、ハ. 指示されるものが外に表われておらず、話し手の意識の中にある場合の指示、の三つにわけて説明している。)

(2)話し手は聞き手をも自分の領域内に包みこんで、「われわれ」という一つの領域をつくり、その領域内に属すると認めたものをコ系で指示し、領域外のものであると認めたものをソ系、あるいはア系で指示する。(筆者注：これも現場指示と文脈指示にわけて説明している。現場指示の場合「われわれの領域外のもので比較的近いものをソ系で指示し、遠く離れたものをア系で指示する。」とのべている。)

2. のこされた問題

以上紹介した説は、いずれも、コソアの指示領域について、従来の「近称・中称・遠称」説と佐久間説(自称・対称・他称)とを何らかの形で両立あるいは混在させている。これは佐久間以後のコソアドに対する研究の特徴として、注意しておく必要があるだろう。

しかし、これらの研究によってコソアドの問題がすべて解決されたわけではなく、まだ多くの問題がのこされているとおもわれるので、そのいくつかについてのべる。

2.1. コソアドのあらわれかたの事実について

コソアドのあらわれかたの事実の認定は論者によって必ずしも一致していない。

(1)阪田は「話し手のうしろにでるソ」について、話し手ときき手を一つの「われわれ」のなわばりとみたととき、「われわれ」の領域外で比較的近いものをソ系でしめすとのべているが、服部は佐久間説を正しいとする宮田に批判され、「話し手のうしろにでるソ」は方言的なものであると修正した。

(2)ア系のあらわれかたについて、渡辺、高橋(1956)、阪田らは、話し手ときき手が接近しているときにはじめてア系があらわれるといっているが、

最近の観察では（特に鈴木の観察では）、話し手ときき手がはなれている場合でも、両者から遠いものとしてとらえたときア系があらわれる、つまり話し手ときき手の間にア系があらわれる現象があるようにおもわれる。

2.2. コソアドのなわばりのとらえかたについて

話し手ときき手がはなれている場合、その両者の中間にア系がでるとすれば、渡辺、阪田らのいうように、話し手ときき手を一つの「われわれ」のなわばりとしてとらえたときにだけア系がでるのではなく、話し手のなわばりときき手のなわばりが別々に存在していても、その両者のなわばりの中にないものに対してア系をつかうのではないだろうか。

また、話し手ときき手の中間にア系がでながら、しかも話し手のうしろにソ系がでるとすれば、高橋（1956）のいうように、きき手のなわばりのひろがり話し手のうしろにまで達して話し手のうしろにソ系がでるのだという考え方はなりたたなくなる。

これらのなわばりの構成のしかたについて再検討する必要がある。

2.3. コレ、ココ、コッチのちがいや、さすもののカテゴリーのちがいについて

コ系、ソ系、ア系と、ひとまとめにしていう場合がよくあるが、コレ、ソレ、アレの類、ココ、ソコ、アソコの類、コッチ、ソッチ、アッチの類などの間では、必ずしもコ・ソ・アのあらわれかた、あるいは、なわばりの構成のされかたが一致しているとはおもわれない。

また、同じコレ、ソレ、アレといっても、ものをさす場合、ひとをさす場合、方向、場所をさす場合など、いろいろである。それらカテゴリーによっても、なわばりの構成がことなるとおもわれるが、このようなことばの類や、さすもののカテゴリーによるちがいについての研究はまだされていない。

2.4. さしめし行動の形態について

たとえば、話し手ときき手が近くにいる場合、「ココ」といえば、話し手ときき手がいる場所をあらわすが、話し手がゆびさして「ココ」、「ソコ」といえば、話し手のさす場所が「ココ」になり、「ソコ」になる。

また、ゆびさした場合、対象に直接さわったか、さわらなかったかによっても、コソアドのあらわれかたがことなるようである。

このようなゆびさしのありなし、さしかたのちがいによるなわばり構成の変容についても、まだ研究の手がつけられていない。

以上のべたような、いくつかの問題がのこされているので、これからその問題点にそって研究を展開していきたい。

今回は、おもに1)コソアドのあらわれかたの事実について、2)コソアドのなわばりのとらえかたについて、の二点を、実験の結果の分析を通してあきらかにする。

II 実験

1. 実験の目的

(1) コソアドのあらわれかたの事実について

- a 論者によって見解がことなる「話し手のうしろにでるソ」について、事実をあきらかにする。
- b 話し手ときき手が接近したときにのみア系があらわれるとする説が正しいか否かをあきらかにする。

(2) コソアドのなわばりのとらえかたについて

話し手のなわばりはコ系、きき手のなわばりはソ系、その他はア系、または、話し手、きき手両者を「われわれ」ととらえたとき、その領域内をコ系、領域外で比較的近い場合はソ系、それより遠いところはア系であらわすといわれているが、上述の事実をあきらかにすることによって、コソアの領域となわばりの関係について検討する。

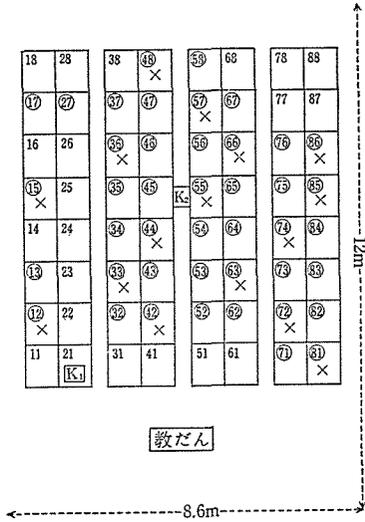
目的(1)、(2)をみるために、つぎの二種類の実験イ、ロをおこなった。

2. 実験イ

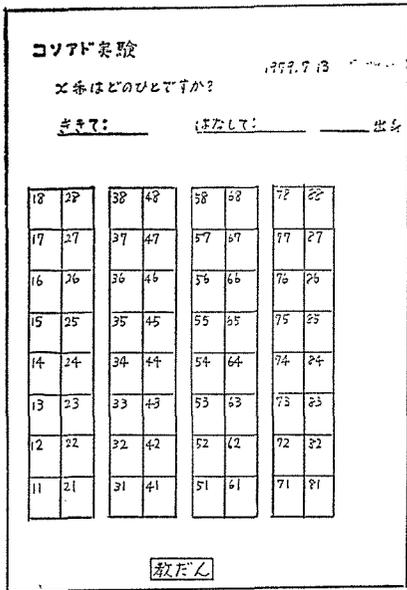
2.1. 実験の方法

第6図のように教室のなかの座席にすわっている学生たち(○印のついたところに学生がいる)が、教室のなかの一定の箇所(第1回はK₁、第2回

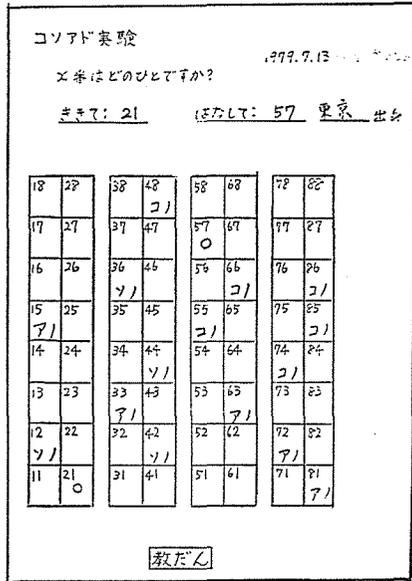
第6図



第7図



第8図



はK₂の場所)に立っているきき手に対して、×印のところすわっている学生のことをはなす場合に、それぞれ、「この人」「その人」「あの人」のうちどれではなすかをしらべて、コソアの分布がどのようになるかを分析した。

(1)教室のなかの全部の座席に11～88の番号をふり、そこにすわっている学生たちにその番号をかいたプラカードをもたせる。

(2)質問者(きき手)の位置を21番のところに固定する。

(3)学生たちには、それぞれ1枚ずつ第7図のような調査票をわたし、「きき手の欄に「21」、「はなして」の欄に自分の座席番号(プラカードの番号)、「出身」のところに出身都県をかかせる。

(4)まず、72番の学生にプラカードをあげさせ、学生たち(話し手)に対して、質問者(きき手)が「72番の人はどこの人ですか?」と質問し、学生たち(話し手)は、いっせいに「質問者」にむかって、声を出して「コノ(ソノ、アノ)ひとです。」と答えたのち、調査票の72のところ、いま自分が言ったとおりに、「コノ(あるいはソノ、あるいはアノ)」とかきいれる。

なお、ここにいう「きき手」は質問者であり、「話し手」はその質問に答える学生である。質問の立場でみた場合には、質問者が学生にたずねるのであるが、このコソアドの発言としては学生が質問に対してコノ、(ソノ、アノ)ではなすので、学生が話し手であり、質問者がきき手になるわけである。

(5)これと同じことを、72のあと、33—55—63—36—44—74—48—15—66—12—57—42—86—81—85の順にくりかえし、1回ごとに調査票に記入させて、85をおわってから、これを回収する。第8図は、その記入例である。

(6)つぎにきき手の位置をK₂(教室の中央)に移動して、あたらしい調査票をわたし、「きき手」の欄に「45—55」とかきいれさせたのち、(5)と同じ順で72～85の16回、おなじことをくりかえして1回ごとに記入させ、回収する。これで43(学生数)×16×2=1376例のデータがえられたわけである。

2.2. 実験の結果, 考察

被験者43名のうち、関東出身者35名だけについて、合計70枚の調査票を分析した。出身地をしぼったのは、服部一宮田論争のようなことをさけるためである。

2.2.1. 結果のまとめかた

この70枚の調査票は話し手の位置がバラバラなので、コ・ソ・アの分布状況を全体としてながめるために、つぎのようになつづきで、話し手の位置を一点にあつめた。

(1)それぞれの調査票の話し手の位置に青点をうち、きき手の位置に赤点をうつ。(点は、話し手、きき手の座席のマス中央にうった。)

(2)青点と赤点を直線でむすんで、その距離をはかり、その距離によって、調査票を8グループにわけた。(0.6~1.0m—5人, 1.2~1.5m—4人, 1.7~1.8m—6人, 2.1~2.8m—14人, 3.1~3.8m—13人, 4.1~4.75m—9人, 5.2~5.9m—11人, 6.1~6.8m—8人)

(3)グループごとに調査票を、つぎのa, bの要領でかさねあわせる。

a:それぞれの調査票の青点が同じ一点に集まるようにかさねて、ハリでさす。

b:それぞれの調査票の、青点と赤点をむすぶ線が一線にかさなるようにまわして、固定する。

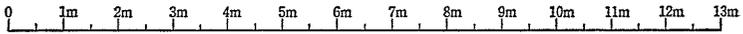
これによって、話し手ときき手がそれぞれ同じところに集まるわけである。(ただし話し手ときき手の距離が完全に同じではないので、きき手の点(赤点)は、すこしはばができる。)

(4)こうして、かさねあわせたグループごとに、調査票に記入されたすべてのコノ、ソノ、アノの位置を一枚の紙にうつしだす。この場合、(i)それぞれのコノ、ソノ、アノの位置は、ますの中心点とする、(ii)「コノ」、「ソノ」、「アノ」はそれぞれクロマル、シロ三角、クロ長方形であらわしわけた。

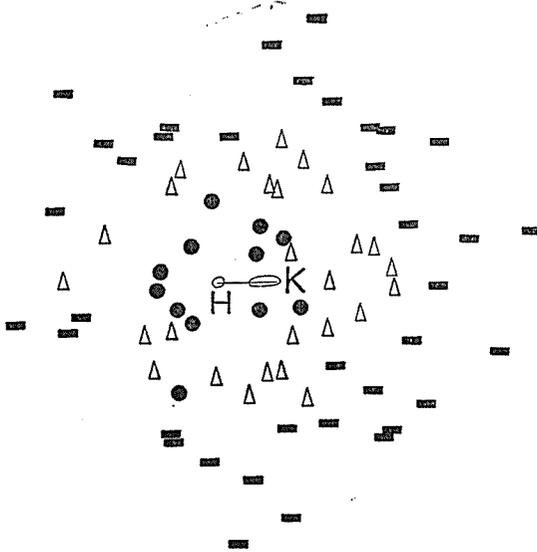
(5)このようにしてできた図が、第9図1~8である。

第9図 コソアのあらわれかた（実験イによる分布）

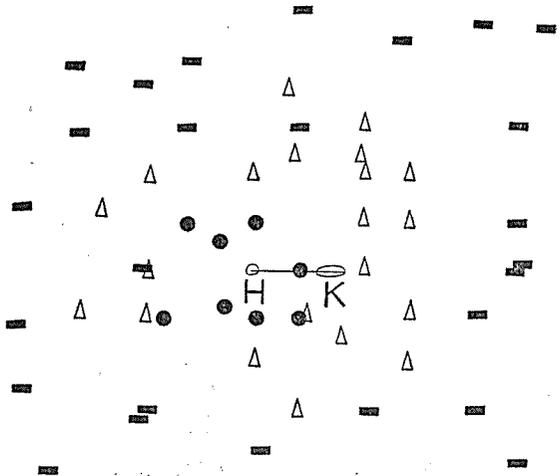
● コノ △ ソノ ■ アノ



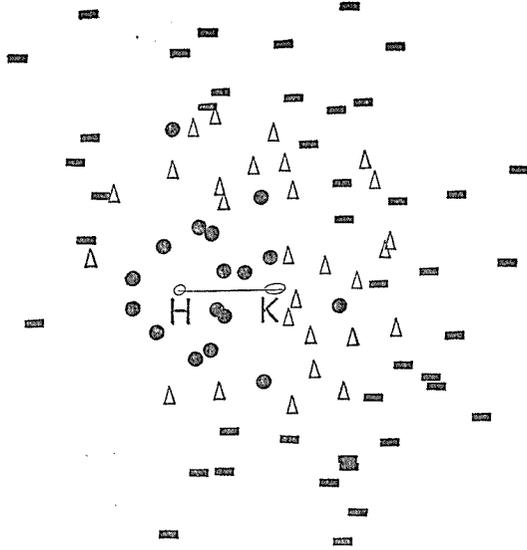
1. H-K : 0.6~1.0m, 5人



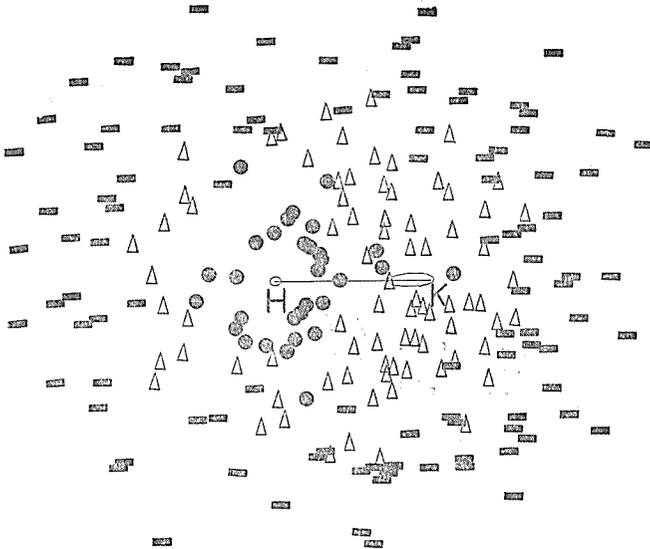
2. H-K : 1.2~1.5m, 4人



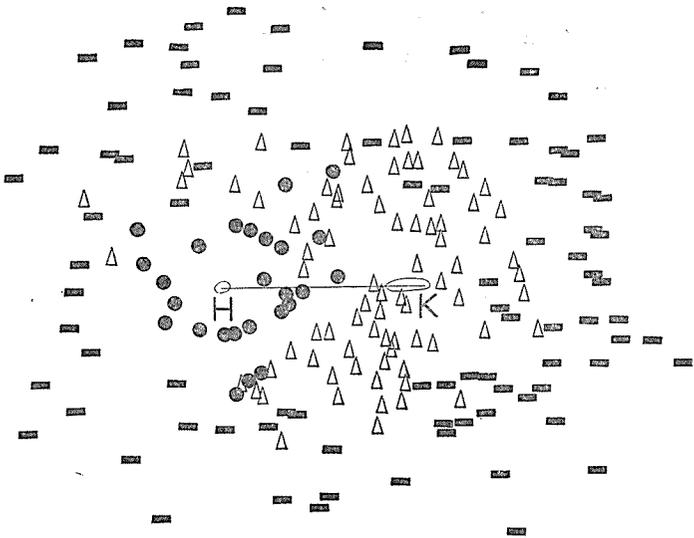
3. H-K : 1.7~1.8m, 6人



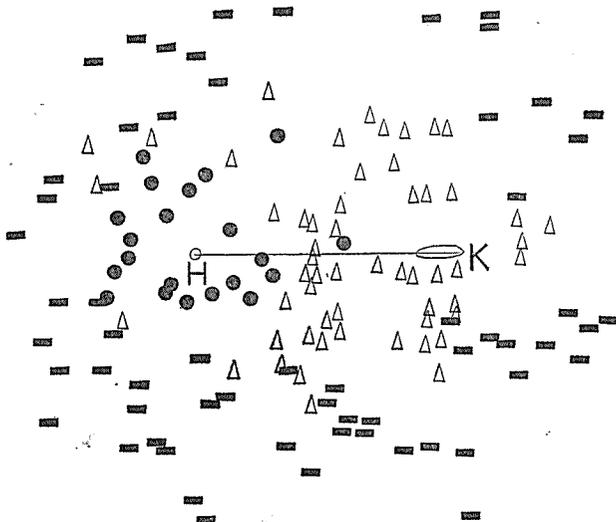
4. H-K : 2.1~2.8m, 14人



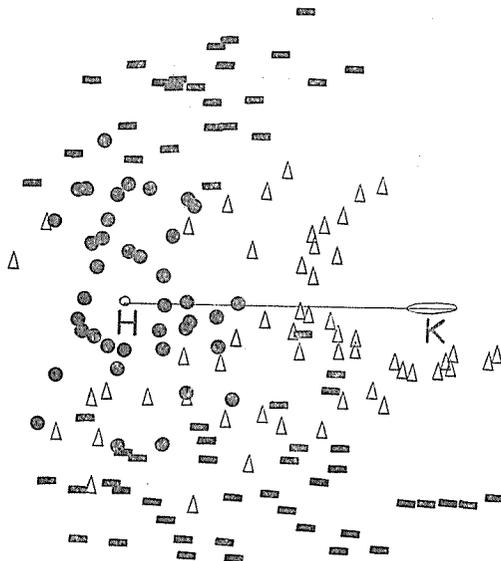
5. H-K : 3.1~3.8m, 13人



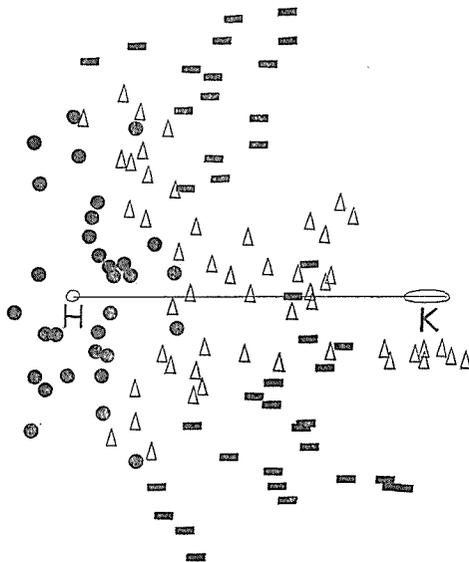
6. H-K : 4.1~4.75m, 9人



7. H-K : 5.2~5.9m, 11人



8. H-K : 6.1~6.8m, 8人



2.2.2. 結果の図の解釈

結果の図はつぎのように解釈される。

(1) 第9図1 話し手からきき手までの距離：0.6～1.0m（5人）

○話し手を中心として、話し手—きき手の距離を半径とする円をえがくとすると、その円の中はコ系、それより外側に、話し手—きき手の距離の2.5倍の長さを半径とした同心円をえがくと、その円の中は多くがソ系、もっとはなれたところはア系になる。ただし、ソ系になる範囲であっても、きき手よりも話し手にちかい側にはコ系がでている例もある。

○なお、半径の大きさについては、へやのひろさや、被験者のちらばり方によって多少かわりうるとおもわれるが、ここでは今回の実験の結果をそのままにしておく。

(2) 第9図2 話し手からきき手までの距離：1.2～1.5m（4人）

○話し手を中心として、話し手—きき手の距離の半分を半径とする円をえがくと、その円の中はコ系、その外側に、話し手—きき手の距離の2倍の長さを半径とした同心円をえがくと、その円の中はソ系、それより外側はア系になる。ソ系になる範囲であっても、話し手のうしろ側にはコ系がやすい。

(3) 第9図3 話し手からきき手までの距離：1.7～1.8m（6人）

○話し手を中心として、話し手—きき手の距離の半分よりすこし長い距離を半径とする円をえがくと、その円の中はコ系、その外側に、話し手—きき手の距離を半径とする同心円をえがくと、その円の中にソ系があらわれる。

○また、きき手を中心にして、話し手—きき手の距離の1.5倍くらいの距離を半径とする円をえがくと、その円の中はソ系があらわれる。

○これら二つのソ系の外側にア系があらわれる。

○ソ系になる範囲であっても、コ系やア系がでている例がある。

(4) 第9図4 話し手からきき手までの距離：2.1～2.8m（14人）

○話し手を中心として、話し手—きき手の距離の半分を半径とした円をえが

くと、その円の中はコ系、その外側に、話し手—きき手の距離を半径とした同心円をえがくと、その円の中はソ系があらわれる。

○きき手を中心として、話し手—きき手の距離を半径とする円をえがくと、その円の中はソ系があらわれる。きき手のちかくにコ系があらわれている例もある。

○この二種類のソ系の外側にア系があらわれる。

(5)第9図5 話し手からきき手までの距離：3.1～3.8m (13人)

○話し手を中心として、話し手—きき手の距離の半分を半径とした円をえがくと、その円の中はコ系、その外側に、話し手—きき手の距離よりすこし短い距離を半径にした同心円をえがくと、その円の中はソ系があらわれる。

○きき手を中心として、話し手—きき手の距離の半分よりすこし長い距離を半径とする円をえがくと、その円の中はソ系があらわれる。

○ソ系の領域をしめす二つの円の外側にア系があらわれ、その二つの円の接点の付近の外側は、ソ系が多いが、接点のちかくまでア系のくいこんでいるものがある。

(6)第9図6 話し手からきき手までの距離：4.1～4.75m (9人)

○話し手を中心にして、話し手—きき手の距離の $\frac{1}{2}$ くらいを半径とする円をえがくと、その円の中はコ系、その外側に、話し手—きき手の距離の半分以上を半径とする同心円をえがくと、その円の中はソ系があらわれる。

○きき手を中心として、話し手—きき手の距離の半分以上を半径とする円をえがくと、その円の中はソ系があらわれる。

○この二つのソ系の外側にア系があらわれる。その二つの円の接点の付近の外側はソ系が多いが、第9図5よりも、すこしふかくくいこむ形でア系のあらわれるものがある。

(7)第9図7 話し手からきき手までの距離：5.2～5.9m (11人)

○話し手を中心として、話し手—きき手の距離の $\frac{1}{2}$ くらいを半径とする円をえがくと、その円の中はコ系、その外側に、話し手—きき手の距離の半分以上

- を半径とする同心円をえがくと、その円の中はソ系があらわれる。
- きき手を中心として、話し手—きき手の距離の半分くらいを半径とする円をえがくと、その円の中はソ系があらわれる。
- この二種類のソ系の外側にア系があらわれ、その二つの円の接点の外側のソ系とア系の共存するところをみると、第9図の5、6よりもさらにふかく話し手ときき手の間にくいこんでくる。
- 話し手のまわりのコ系のあらわれる範囲は、話し手の両横にかなりひろがっている。
- なお、第9図7、8は席の配置の関係から話し手およびきき手のうしろのデータが不足することになった。

(8)第9図8 話し手からきき手までの距離：6.1～6.8m（8人）

- 話し手を中心として、話し手—きき手の距離の $\frac{1}{2}$ くらいを半径とした円をえがくと、その円の中はコ系、その外側に、話し手—きき手の距離の半分くらいを半径とした円をえがくと、その円の中はソ系があらわれる。
- きき手を中心として、話し手—きき手の距離の $\frac{1}{2}$ くらいを半径とする円をえがくと、その円の中はソ系があらわれる。
- この二つのソ系の領域の外側にア系があらわれる。その二つの円のあいだのところをみると、ア系の勢力がすこしつよまって、ア系のなかには、話し手ときき手をむすぶ線上にあらわれるものもみられる。
- 話し手のまわりのコ系があらわれる領域は、第9図の7と同じように、話し手の両横にひろがっている。

2.2.3. 考察

話し手ときき手の間の距離が短かければ、話し手ときき手を一つのなわばりとしてとらえていることがわかる。(第9図1、2)

話し手ときき手の間がひろくと、それぞれのなわばりがはっきりとあらわれる。すなわち、話し手のまわりはコ系、きき手のまわりはソ系、話し手から（または、きき手からも）遠いところはア系であらわされる。

ここにもう一つつけくわえなければならない現象がある。話し手のまわり

のコ系の外側に、きき手のまわりのソ系とはことなるソ系があらわれることである。(第9図5～第9図8参照)「ソ系」のあらわれかたに二種類あることがわかる。

話し手から少しはなれたところにてるソ系について、かつて高橋 (1956) は、「話し手と相手が接近したときには、話し手のうしろにもソ系があらわれる。」(「わのなわばり」の方が「なのなわばり」よりちいさいので、話し手がきき手に接近するにつれて、日食のように「なのなわばり」のなかへはいつていくかたちとなる。)とのべた。

もしそうならば、話し手ときき手がはなれた場合に、話し手のまわりのコ系ときき手のまわりのソ系の間にア系がくいこむことはないはずである。

実験の結果、第10図の斜線部分にもア系があらわれているのだが、このことはこの高橋 (1956) では説明できない。

以上のことからつぎのことが考察される。

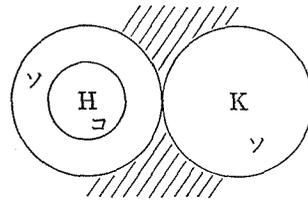
1. 話し手ときき手が近くにいるときは「われわれ」という領域をつくる。コ系は「われわれ」の領域内にあらわれ、ソ系は「われわれ」の領域外でコ系よりすこし遠いところに、ア系はさらに遠いところにあらわれる。
2. 話し手ときき手がはなれているときは、話し手ときき手はそれぞれの領域をつくる。
 - (1)コ系は、話し手のまわりにあらわれる。
 - (2)ソ系は、きき手のまわりと、話し手のコ系の外側にあらわれる。
 - (3)ア系は、二つのソ系のさらに外側にあらわれる。

3. 実験口

3.1. 実験の方法

ほそながく一直線にならべた机の両端に、話し手ときき手とをむかいあわ

第10図



せにたたせ、その机の上におかれたものをなんといっであらわすかをしらべた。この実験は話し手ときき手の間の距離、話し手のきき手および対象へのはたらきかけかたを考慮して、つぎの三種のセットにわけて実験をおこなった。

3.1.1. 第1セット「みてください」（4組×1）

話し手からきき手までの距離を6mにし、その間にある机の上の対象（マイクスタンド）の位置をかえ、コノ、ソノ、アノをつかって、「～ノ マイクスタンドをみてください。」といってもらう。話し手ときき手のくみあわせをかえて、四組実験した。

3.1.2. 第2セット「だれのふでばこ」（3組×3）

話し手からきき手までの距離を4.8mとし、対象物（この場合はふでばこ）を①1m、②3.5m、③2m、④4m、⑤2.4mの位置におき、コレ、ソレ、アレをつかって、A「～ハ 私のふでばこです。」、B「～ハ あなたのふでばこですか。」、C「～ハ だれのふでばこですか。」をそれぞれ①～⑤の位置の順にいってもらう。話し手ときき手のくみあわせをかえて、三組実験した。対象物の所有者のちがいによる指示状況をみるために質問を設定した。

3.1.3. 第3セット「どうしてください」（3組×3）

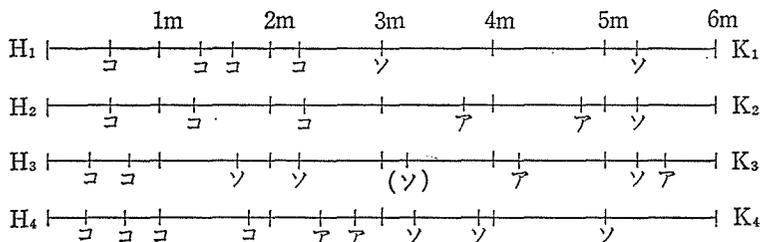
話し手からきき手までの距離、対象物の位置、対象物をおく順序、実験数は第2セットと同じである。動作をうながさない場合、動作をうながす場合、何かわからないものに対する場合などで、指示がどうちがうかをみるために質問をかえてみた。コレ、ソレ、アレをつかって、D「～ヲ みてください。」、E「～ヲ かぶってみてください。」、F「～ハ なんですか。」といってもらう。対象物をかえて（D、Eではサンバイザー、Fではマグネットクリップ）実験した。

3.2. 実験の結果、考察

3.2.1. 第1セット「みてください」（4組×1）

実験の結果は第11図のとおりである。

第11図 第1セット



（マイクスタンドをおいた順は、話し手から近いほう、または、遠いほうからの順ではなく、前の反応を忘れる程度に順不同にした。
 H₃の(ソ)は、観察者のききとりの不十分だったものである。）

話し手からきき手までの距離は6mである。話し手ときき手の間にあるものをさすのに、ア系をつかわないタイプの話し手が1人(H₁)があったが、他の3人(H₂, H₃, H₄)は、コ系とソ系の間にア系をつかっている。すなわち、話し手に近いところはコ系、きき手に近いところはソ系、話し手からもきき手からも遠いところのものとしてとらえたときはア系をつかうようである。

これらの例(H₂~H₄)でみるかぎり、高橋(1956)の「ア系は話し手ときき手とが接近したときにのみあらわれる」は訂正されなければならないことになる。

また、H₃は、きき手に近いソ系とは別に、コ系とア系の間に話し手からの遠近でとらえた中称としてのソ系をつかっている。

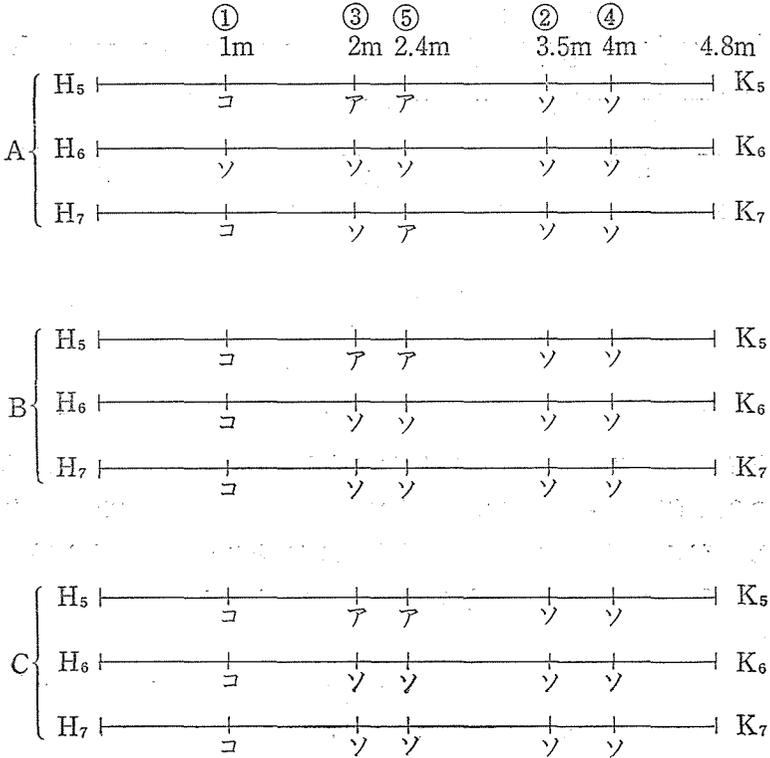
3.2.2. 第2セット「だれのふでばこ」(3組×3)

結果は第12図のとおりである。

なお、A, B, Cは、それぞれ3.1.2.でのべたはなしかたをしめすものである。

話し手から近いところはコ系、きき手に近いところはソ系がでている。(1mから4mまですべてをソ系といった結果、1mのところをソ系でいいあらわしているH₃の例もある。)

第12図 第2セット



問題は、話し手から2mのところ③と話し手ときき手のちょうど中間の2.4mのところ⑤の指示状況である。

③ (2m) と⑤ (2.4m) をすべてア系でこたえる人 (H₅) もいれば、すべてソ系でこたえる人 (H₆) もいる。また③ (2m) ではソ系、⑤ (2.4m) ではア系でこたえる人 (H₇) と、三組それぞれ別であった。③ (2m) をア系でこたえた H₅ は⑤ (2.4m) ではみられなかったまよいが感じられた。

この結果からも、話し手ときき手はなれている場合でも、コ系とソ系の間にア系があらわれていて、話し手のなわばりとしてコ系を、きき手のなわばりとしてソ系を、話し手から遠いものとしてア系をつかっていることがわ

かる。

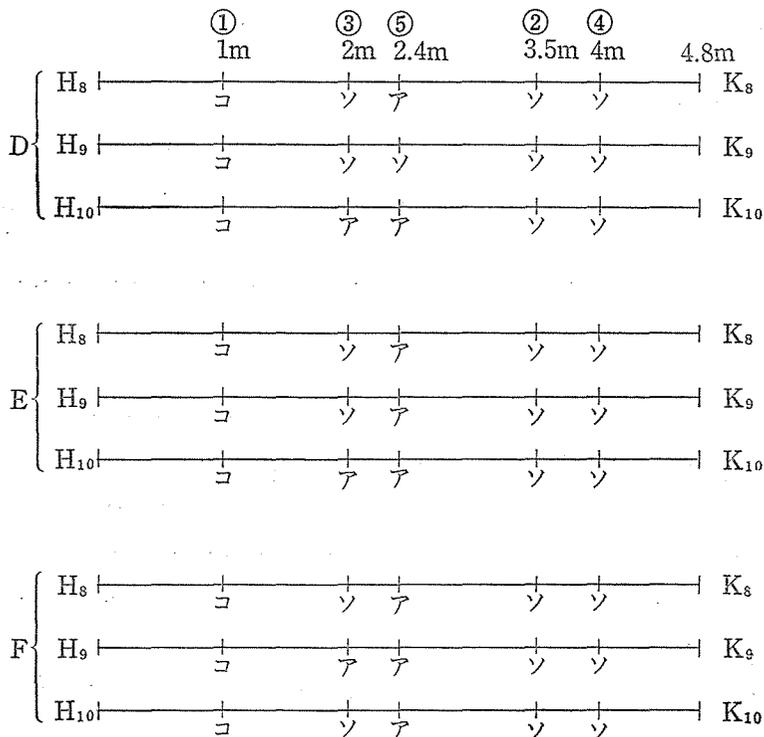
また、第1セットと同様、きき手のなわばり以外のソ系、つまり、中称としてのソ系をつかっている H₇ の例がある。

対象物の所有者のちがいは、この結果にはあらわれなかった。

3.2.3. 第3セット「どうしてですか」(3組×3)

結果は第13図のとおりである。

第13図 第3セット



なお、D、E、Fは、3.1.3.でのべたはなしかたをしめすものである。

第2セットと同様、話し手から1mのところはコ系、話し手から3.5m、4mのところはきき手に近く、どの例もソ系がでている。

話し手から2mのところ③と話し手ときき手の中間の2.4mのところ⑤も

第12図以上にあらわれかたがさまざまである。質問D, E, Fのどれに対しても, ③ (2m) はソ系, ⑤ (2.4m) はア系とつかいわけている H_8 , D, Eの質問には③, ⑤ともにア系をつかいながら, Fの質問に対しては③ (2m) をソ系, ⑤ (2.4m) をア系とつかいわけている H_{10} , Dの質問に対しては, ③ (2m) をア系からソ系にいいかえ, ⑤ (2.4m) をソ系でいい, Eの質問では③ (2m) をソ系, ⑤ (2.4m) をア系, Fの質問では両方ともア系と質問によってつかいわけている H_9 と三者三様である。

この実験では, 話し手に近いところにするコ系と, きき手に近いところにするソ系の間にア系があらわれ, そのア系と話し手に近いコ系の間にソ系があらわれている。

このソ系は話し手からの距離の遠近による中称としてのソ系で, このソ系ときき手のなわばりのソ系との間にあらわれるア系は遠称としてのア系である。

この三つのはたらきかけD, E, Fのちがいはこの結果ではあらわれなかった。

3.2.4. 三種の実験をとおして

この実験の目的は, 話し手ときき手をむすぶ直線上にある対象物の位置によってさしかたがどのようにかわるかということを見るのと同時に, 同じものであってもだれのものであるか, また, それへのはたらきかけかたによってさしかたのちがいがどのようにでてくるかをみることであった。

しかし, この実験では, 所有者, およびはたらきかけかたによる差はみることはできなかった。

この三種の実験をまとめると, コ・ソ・アのあらわれかたはつぎのとおりである。

- 1) 話し手の近くはコ系でさされる。
- 2) きき手の近くはソ系でさされる。
- 3) 話し手—きき手の中間はソ系とア系でさされる。

話し手の方から, きき手にむかってのコソアのでかたは第1表のとおりで

第1表

さしかた	人数 (回数)	個 人 別									
		H ₁	H ₂	H ₃	H ₄	H ₅	H ₆	H ₇	H ₈	H ₉	H ₁₀
ソ (全部ソ)	1 (1)						1				
コソ	4 (6)	1					2	2		1	
コアソ	5 (8)		1		1	3				1	2
コソアソ	4 (6)							1	3	1	1
コソアソア	1 (1)			1							
計	10(22)	1	1	1	1	3	3	3	3	3	3

ある。

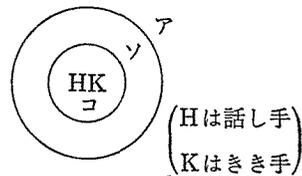
このような点からコソアドによる空間分割の原理は、話し手ときき手のなわばりという佐久間説に代表される原理と、従来からの話し手からの遠近という原理が共存していると考えられ、実験イで考察したことが、この実験ロによってもうらづけられたことになる。

4. 結論

以上の実験イ、ロをとおしてつぎのように
いうことができる。

話し手ときき手が接近しているときは、コ・ソ・アを距離的対立としてとらえる。話し手、きき手からみて近いところは近称のコ系、それよりすこしはなれたところは中称のソ系、さらにはなれたところは遠称のア系になる。

第14図

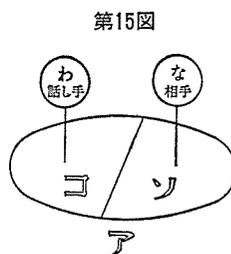


大槻に代表される考え方の訂正としてだされた佐久間説では、この点にふれておらず、その後の渡辺 (1952)、阪田 (1971) らによって指摘された「われわれ」のなわばりをみとめることによってこのとらえかたが説明できる。

つぎに、話し手ときき手がはなれているときは、それぞれのなわばりをもつ。この考え方になつ佐久間は、わ (話し手) のなわばりはコ系、な (きき手) のなわばりはソ系、それ以外はア系に属するとして、つぎの第15図をし

めず。(なお、この図は第1図と同じである。)

話し手ときき手がそれぞれのなわばりをもつ点においては、佐久間説をみとめるものであるが、さらにこれにくわえなければならないことは、きき手のなわばりのソ系とは別に、話し手のなわばりのコ系の外側に、つまり、話し手からすこしはなれたところにソ系があらわれる現象があることである。



(なお、この場所は、佐久間説では、わのなわばりの外側にあたる場所であって、ア系があらわれるはずである。)

このソ系は、きき手との関係なしに、話し手からみた対象の位置の遠近によって、つまり、近称より遠いところのものとしてとらえた中称としてのソ系ではないかと考えられる。

したがって、「話し手のうしろのソ」は、高橋 (1956)、服部 (1961) のいうような、話し手がきき手のなわばりの中につつまこまれた結果なのではなく、話し手からの距離の遠近でとらえた中称のソ系なのである。しかし、話し手ときき手が接近するにしたがい、きき手のなわばりのソ系と、中称としてのソ系がかさなりあう形であらわれることになる。

ア系のでかたの考え方については、つぎのように三種類あった。

一つは、従来からの話し手からの距離の遠近としての遠称のア系で、二つめは、佐久間説による話し手、きき手のなわばり以外の他称としてのア系である。もう一つは、渡辺 (1952)、阪田 (1971) らのいう話し手ときき手がわれわれのなわばりを構成する場合の遠称としてのア系という考え方である。

阪田は、「われわれ」のなわばりとしてとらえたとき、その領域外でわれわれから比較的近ければソ系、それより遠ければア系があらわれ、話し手ときき手がはなれている場合にはア系はあらわれないとしているが、前にものべたように、話し手ときき手がはなれている場合でも、それぞれのなわばりのほかに、中称のソ系の外側に遠称のア系があらわれる。その結果、話し手と

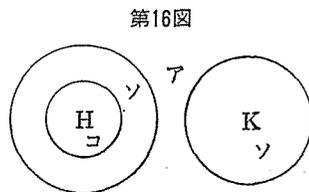
きき手がはなればはなれるほど両者の間に中称のソ系も、遠称のア系もは
いりこむことになる。

佐久間説の他称としてのア系という考え方によると、話し手ときき手の間
にでるア系については説明できるとしても、中称としてのソ系の領域はすべ
てア系になるはずである。

佐久間説がコ・ソ・アの対立としてのべていることは、他称のアをのぞい
て、コ・ソの対立としてとらえたほうがいいのではないだろうか。

以上のように、話し手ときき手がはなれている場合のコ・ソ・アの指示体
系は、話し手ときき手の対立のなかで、対象を自称・対称というルールでと
らえ、また一方で、きき手との関係なしに、対象との距離によって近称・中
称・遠称というルールでとらえる二元論的なとらえ方がかなり積極的に共存
していることがわかる。

したがって、ソ系には、中称としてのソ系
と対称としてのソ系の二種類あり、また、ア
系は、話し手ときき手がはなれている場合で
も中称のソ系の外側に、つまり、話し手から
遠いところにあらわれ、そのため、話し手と
きき手の間にもはいることになる。



そこで、佐久間説による第15図をうのような第16図にかえる必要があ
る。

以上のことを、まとめると、つぎのようになる。

コ・ソ・アの指示体系は、話し手ときき手が接近しているかいなかによっ
て二つに分かれる。

1) 話し手ときき手が接近している場合、「われわれ」という領域をつく
り、その「われわれ」の領域内のものをコ系であらわし、領域外で、比
較的近ければソ系で、それより遠ければア系であらわす、というように
話し手、きき手から対象までの距離の遠近によって指示される。

2) 話し手ときき手がはなれている場合、話し手ときき手はそれぞれの領

域をもつ。つまり、話し手は、きき手の領域をソ系であらわしながらも、話し手独自の領域をつくり、話し手から対象までの距離の遠近によって、コ・ソ・アをつかいわける。

Ⅲ 文献

1. コソアドの記述についての文献一覧表 (1833~1941)

第1欄は、直接みることのできた版の年代、()内は初版の年代。第3欄のHは、話し手からの距離でとらえたもの、H-Kは、話し手と聞き手の関係でとらえたもの、他は、その他、またはとらえかたののべられていないものをあらわす。また、第4欄では、名称のあるものは行頭から、名称がなく、コソアドの説明のあるものは3字さげで、名称も説明もないものは、7字さげではじめる。

年代	著者、書名	H I K	他	名称および注記
1833	鶴峯戊申『語学新書』		○	・コノ、ソノの区別のみ。
1874	田中義廉『小学日本文典 卷二』	○		コレ：近くにあるもの ソレ：コレとアレの中間 アレ：遠くへだたりたる
1876	中根淑『日本文典 上巻』		○	・コ、コレ、ソ、ソレ、カ、カレ、ア、アレ
1886	土居通予『文法指南 卷之中』		○	コレ：彼の反にして体に属してそのまえにあるをさしている (其) ソノ、ソレ：ソレの方を指して用いる (夫) ソレ、カノ：さきにあるものを指している心もち カノ、カレ：アノという意 (彼) カノ、カレ：此の反にして我に対していうこと、また、カシコという意
1887	チュンバレン『日本小文典』		○	コレ：近きもの ソレ：近からず遠からざるもの カレ、アレ：遠きもの
1888 (1869)	アストン『日本口語小文典』(第		○	コレ：第一人称 ソレ：第二人称、話し手の眼前にあるも

年代	著者, 書名	H H K 他	名称および注記
1889	4版) 谷千生『詞の久 美立 上』	○	の, または記憶にあるもの アレ: 第三人称 こ: そ: 近くむかえるなり, 又遠くむかえる 方には親疎ありて あ, か: 遠くむかい あ: 親しきにいい か: 疎きにいうなり
1890 (1878)	物集高見『初学 日本文典 上』 (第2版)	○	第一等: コ, コレ, 直に其事物を指す 第二等: ソ, ソレ, 次の事物を指す 第三等: ア, アレ, カ, カレ, 又次の事物を指す 是順序に因て論ずるときは又遠 近親疎の反対をも分ち得べし
1891	飯田永夫『日本 文典問答 完』	○	近称: コレ, ココ, コナタ, もっとも近き 中称: ソレ, ソコ, ソナタ, ややはなれたる 遠称: アレ, アソコ, アシコ, アナタ, カナタ, 遠き
1892 (1891)	高津銀三郎『日 本中文典』(第 3版)	○	近称: 自身にもっとも近き事物, 場所, 方角 対称: 眼前にあるものをさす言 遠称: はるかにへだたりたるところにあるも の, もしくは眼前にあらざるものをさす
1897	岡倉由三郎『日 本文典大綱 全』	○	近位: 説話する人の目よりみて近し 中位: やや遠きを示す 遠位: なお一層遠きを示す
1898	中邨秋香『皇国 文法積義』	○	近称: その事物, 又はその地位, 方向を直ちに さす 中称: 直接ならず, やや相へだちたるものをい う 遠称: 遠くはなれたるをいう
1898 (1889)	大槻文彦『語法 指南』(『言海』 の巻頭)	○	近称: コレ, ココ, コナタ, もっとも近きにいう 中称: ソレ, ソコ, ソナタ, ややはなれたるに いう 遠称: アレ, アソコ, アナタ, 遠きにいう
1899 (1897)	落合直文『日本 大文典 全』(再 版)	○	近称: 語る人に近き事物, 場所, 方向 中称: ややへだたりたる事物, 場所, 方向 遠称: 遠き事物, 場所, 方向

年代	著者、書名	H K 他	名称および注記
1900	杉敏介『日本小語典』	○	近称：是れ、此こ、こち 中称：其れ、其こ、其ち 遠称：あれ、あしこ、かしこ、あち、をち
1901	前波仲尾『日本語典 全』	○	近称：これ、ここ 遠称：それ、そこ 不定称：あれ、あしこ
1901	金井保三『日本俗語文典 全』	○	自称：これ、ここ、こち、こちら、ここいら、この、こんな、こーいう、こう 他称：それ、そこ、そち、そちら、そこいら、その、そんな、そーいう、そう 別称：あれ、あす(そ)こ、あち、あちら、あす(そ)こいら、あの、あんな、あーいう、ああ
1901	草野 清民『草野氏日本文法 全』	○	第一称：第三者の、聴者よりも談者に近きには、「こ」「これ」を用いる。 第二称：第三者の、談者よりも聴者に近きには、「そ」「それ」を用いる。 第三称：第三者の、談聴両者に対する距離同一なる時、あるいは同一ならずとも、殆ど相似てこれを区別する必要なき時には、「か」「かれ」「あ」「あれ」を用いる。 距離の関係ばかりでなく事の親疎についても同様に解すべきなり。
1901	松下大三郎『日本俗語文典』	○	近称(近主称)：話説の主体即話をする人に近き外物を指す。 中称(近客称)：話説の客体即話をきく人に近き外物を指す。 遠称：話説の主体(話す人)にも客体(きく人)にもいづれへも遠き事物をさす。
1903 (1898)	三土 忠造『再訂中等国文典 中巻』(再訂25版)	○	近称：最も近きに用いる。 中称：ややはなれたるに用いる。 遠称：遠きに用いる。
1903	金沢庄三郎『日本文法論』	○	・そのさししめす距離の遠近によりて、近称、中称、遠称の三種に分つ。 近称：自己に最も近きを指し示めすもの。こを

年代	著者、書名	H H K 他	名称および注記
1904 (1890)	落合直文・小中 村義象『中等教育 日本文典』(第 31版)	○	用いる。 中称：ややへだたりたるを指し示めすもの。そ を用いる。 遠称：はなはだ遠きを指し示めすもの。あ、か を用いる。
1905 (1904)	芳賀 矢一『中等 教科明治文典 卷 之一』(訂正3 版)	○	・語る人と聴く人とによりて、 かはりあるはもちろん、また 遠近の別あるものとするべ し。
1905 (1902)	岡田正美『解説批 評日本文典 上』 (第3版)	○	事物：これ、それ、かれ、いづれ、なに、 これら、それら 場所：ここ、そこ、あそこ、かしこ、い づこ、どこ 方向：こち、そち、こちら、あちら
1906	吉岡郷甫『日本 口語法』	○	近称：記者又は談話者が自己にもっとも近き関 係にある事物、場所、方向の本名のかわ りに用いる詞の称。こ、これ、ここ、こ ち、こなた 中称：記者又は談話者が自己にやや遠き関係に ある事物、場所、方向の本名にかえて用 いる詞の称。それ、そこ、そち、そなた 遠称：記者又は談話者が自己にもっとも遠き関 係においてある事物、場所、方向の本名 のかわりに用いる詞の称。あれ、かれ、 あしこ、かしこ、あそこ、かなた、あな た
1906 (1905)	小山左文二『日 本文法の解説及 び練習』(第3 版)	○	近称：手近な物事の名にかえて用いる。 中称：ややはなれた物事の名にかえて用いる。 遠称：ずっとはなれた物事の名にかえて用い る。 事物：こ、これ、そ、それ、あ、あれ、 か、かれ、いづれ、なになど。 場所：ここ、そこ、あし(そ)こ、かし こ、いづこ、どこ、いづくなど。 方向：こなた、こち、そなた、そち、あ なた、かなた、あち、いづかた、

年代	著者、書名	H H K 他	名称および注記
1906	鈴木暢幸『日本口語文典』	○	<p>いづち、どちなど。</p> <p>近位：事物方向等の、自己に近き位置なるものを指示するという詞。</p> <p>中位：自己及び相手より、少しく離れたる位置のものにつきていう詞なり。</p> <p>遠位：自己及び相手より、遠く離れたる位置のもの、もしくは過去の事件等につきていう詞なり。</p>
1907	橋本光秋『高等女学文法教科書中巻』	○	<ul style="list-style-type: none"> ・これ、それ、かれ、いづれ ・ここ、そこ、かしこ、いづこ ・こち、そち、あち、いづち
1908	岡沢鉦次郎『教科参考日本文典要義 全』	○	<ul style="list-style-type: none"> ・これ、それ
1908	山田孝雄『日本文法論』	○	<p>近称：人、事物、場所、方向等につきて、対者よりも説話者に空間的に時間的に近いが、又精神的に親しき意にてさす。</p> <p>中称：説話者よりも対者に近き親しきかの関係にあるものとしてさす。（説話者よりみれば、近称よりも遠きかうときかしてしかも次の遠称よりも近きか親しきかの関係にあるが故なり。）</p> <p>遠称：説話者、対者に共に近きか親しきかの関係をはなれて指示するもの。</p> <p>方向について：唯空間にかぎらず、時間進行上の方向にも用いる。たとえば、或一点より説話者に近づき来るものを近称とし、説話者に遠ざかり行くものを遠称という。</p>
1911	保科孝一『日本口語法 全』(再版)	○	<p>近称：(事物) コレ、コレラ、コチラ (場所) ココ、ココラ (方角) コッチ、コチラ</p> <p>中称：(事物) ソレ、ソレラ、ソチラ (場所) ソコ、ソコラ (方角) ソッチ、ソチラ</p> <p>遠称：(事物) アレ、アレラ、アチラ (場所) アソ(ス)コ、アソ(ス)コラ (方角) アッチ、アチラ</p>

年代	著者、書名	H I K 他	名称および注記
1913	芳賀矢一『口語 文典大要』	○	近称：手近。これ，ここ，こっち 中称：ややはなれ。それ，そこ，そっち 遠称：遠く。あれ，あそこ，あっち
1916	大野佐吉・井上 宗助『国定読本文 語法と口語法』	○	其の指示する事物，場所，方向の遠近によっ て近称・中称・遠称にわけける。 近称：自分の手近にある事物，自分に近接して いる場所，方向の名称にかえて用いる。 中称：自分からややはなれたところにある事 物，自分から少しはなれている場所，方 向の名称にかえて用いる。 遠称：自分より遠くはなれている事物，場所， 方向の名称にかえて用いる。
1922	小林好日『標準 語法精説 全』	○	・さしめされる事物，場所，方向と自分との 位置関係の違いに従って，近称，中称，遠称の 区別がある。
1926 (1905)	和田万吉『日本 文典講義』（第 10版）	○	近称：説話をする人にもっとも近き関係ある事 物，場所，方向。 中称：説話をする人にやや遠き関係ある事物， 場所，方向。 遠称：説話をする人にはなほ遠き関係ある事 物あるいは場所，方向。
1926	三浦圭三『綜合 日本文法講話』	○	・場所の遠近の関係や不定のちがいでわかれ る。 近称：（事物）こ，これ（場所）こ，ここ （方向）こ，こなた，こち，こちら，こ っち 中称：（事物）そ，それ（場所）そ，そこ （方向）そ，そなた，そち，そちら，そ っち 遠称：（事物）あ，か，あれ，かれ（場所） あ，か，かしこ，あし(す)こ，あそこ， あこ（方向）あ，か，あなた，かなた， あち，あちら，あっち
1928	安田喜代門『国 語法概説』	○	・話手ときき手とを中心として，それとの相対 的關係によって三つにわかれる。 近称：きき手よりも話手の方へ空間的，時間的，

年代	著者、書名	H I K 他	名称および注記
1929	徳田浄『新日本文法 上』	○	精神的に近い。 中称：話手よりもきき手の方へ空間的、時間的、精神的に近い。もと遠称に通じて用いられたのではないかの疑がある。 遠称：話手、きき手のいづれからも空間的、時間的、精神的に遠い。 ・話者と指示する事物、場所、方向との位置関係による。 近称：もっとも近いものをさす。 中称：やや遠い場合。 遠称：遠い場合。
1929	友納友次郎『国語教育の基調として標準語法』	○	近称：手近いところにある事物をいう。 中称：少しはなれたところにある事物をいう。 遠称：ずっとはなれたところにある事物をいう。
1930	松下大三郎『改撰標準日本文法訂正版』	○	・説話者（思想者）が自己を基準として其の位置の遠近によって事物を指示する。 第一近称：自己に近いものをさす。 第二近称：対者に近いものをさす。 遠称：遠いものをさすのであるが、自他共にしている事物にかぎる。自他の一方がしらない事物は遠方にあっても遠称を用いない。第二近称、又は第一近称でさす。
1931	木枝増一『高等口語法講義』（再版）	○	・話す人自らと、指し示す事物・場所・方向との位置によって 近称：もっとも近いもの 中称：やや遠いもの 遠称：遠いもの
1931	湯沢幸吉郎『解説 日本文法』	○	近称：話手に近い。 中称：話相手に近い。 遠称：話手にも、相手にも、近くない。
1931	橋本進吉『新文典 新制版 全』（訂正再版）	○	事物：これ、それ、あれ、どれなに 場処：ここ、そこ、あす(そ)こ、どこ 方向：こっち、こちら、そっち、そちら、あっち、あちら、どっち、どちら
1932	三矢重松『文法』	○	近称：これ、ここ、こち、こなた

年代	著者, 書名	H I K 他	名称および注記
1934	論と国語学』 コイヤード『日 本語文典』	○	中称: それ, そこ, そち, そなた 遠称: かれ, かしこ, あち, あなた ・コノ, コレ, ソノ, ソレ, ア ノ, アレ
1940	佐藤喜代治『日 本口語法』	○	・相手との関係によって 近称: こ(の), これ, ここ, こっち, こちら 中称: そ(の), それ, そこ, そっち, そちら 遠称: あ(の), あれ, あそ(す)こ, あっち, あ ちら
1940 (1906)	松本龜次郎『言 文対照 漢訳日本 文典』(訂正増 補40版)	○	・事物, 地位, 方向等を指示する詞なり。しか しその距離の遠近と, さす所の不定とによりて 近称, 中称, 遠称, 不定称の別あり。
1940 (1936)	佐久間鼎『現代 日本語の表現と 語法』(改訂増 補3版)	○	近称: 話手の手のとどく周囲, いわばその勢力 圏内にあるもの。 中称: 話し相手の手のとどく範囲, 自由にとれ る区域内のもの。 遠称: 話手, 相手の勢力圏外にあるもの。
1941 (1916)	文部省『口語法 全』(第13版)	○	近称: 自分に近いものに用いる。これ, ここ, こっち 中称: 自分からすこしはなれたものに用いる。 それ, そこ, そっち 遠称: 自分から遠くはなれたものに用いる。あ れ, あすこ, あっち

2. コソアド関係研究文献 (1833~1980)

- 1833 鶴峯 戊申 「代名言」『国語学体系1 語学新書』厚生閣
1874 田中 義廉 「代名詞」『小学日本文典 卷二』東京書林 雁金屋
1876 中根 淑 「代名詞」『日本文典 上巻』森屋治兵衛
1878 物集 高見 「代名言」『初学日本文典 上』出雲寺
1886 土居 通予 『文法指南 卷之中』青木嵩山堂
1887 チェンバレン 「代名詞」『日本小文典』文部省編輯局
1888 アストン 「Pronoun」『A GRAMMAR OF THE JAPANESE SPOKEN
LANGUAGE』長尾景弼

- 1889 谷 千生 「指示言」『詞之久美立 上』 大八洲学会
- 1889 大槻 文彦 「代名詞」「語法指南」(『言海』の巻頭) 吉川弘文館
- 1890 落合 直文 「代名詞」『中等教育日本文典』 博文館
- 1890 小中村 義象 「代名詞」『日本文典』 金港堂
- 1891 高津 敏三郎 「代名詞」『日本文典』 金港堂
- 1891 飯田 永夫 「代名詞」『日本文典問答 完』 上原書店
- 1897 大槻 文彦 「代名詞」『中等教育日本文典 全』
- 1897 落合 直文 「代名詞」『日本大文典 全』 博文館
- 1897 岡倉由三郎 「指詞」『日本文典大綱 全』 富山房
- 1898 三土 忠造 「代名詞ノ種類」『再訂中等国文典 中巻』 富山房
- 1898 中邨 秋香 「代名詞」『皇国文法訳義』 大日本図書
- 1900 杉 敏介 「代名詞」『日本小語典』 内外出版協会
- 1901 前波 仲尾 「代名詞」『日本語典 全』 吉岡宝文軒
- 1901 金井 保三 「代名詞」『日本俗語文典 全』 宝永館
- 1901 草野 清民 「指詞」『草野氏日本文法 全』 富山房
- 1901 松下大三郎 「代名詞」『日本俗語文典』 誠之堂
- 1902 岡田 正美 「代名詞」『解説批評日本文典 上』 博文館
- 1903 金沢庄三郎 「代名詞」『日本文法論』 金港堂
- 1904 芳賀 矢一 「代名詞」『中等教科明治文典 巻之一』 富山房
- 1905 小山左文二 「代名詞」『日本文法の解説及び練習』 井冽堂
- 1905 和田 万吉 「代名詞」『日本文典講義』 早稲田大学出版部
- 1906 吉岡 郷甫 「代名詞」『日本口語法』 大日本図書
- 1906 鈴木 暢幸 「代名詞」『日本口語文典』(帝国百科全書) 博文館
- 1906 松本亀次郎 「代名詞」『言文対照漢訳日本文典』(宏文書院叢書) 国文堂書局
- 1907 橋本 光秋 「代名詞」『高等女学文法教科書 中巻』 同文館
- 1908 岡沢 鉦次郎 「代名詞ニツキテ」『教科参考日本文典要義 全』 博文館
- 1908 山田 孝雄 「代名詞」『日本文法論』 宝文館
- 1908 三矢 重松 「名詞 代名詞」『高等日本文法』 明治書院
- 1911 保科 孝一 「代名詞」『日本口語法 全』 同文館
- 1912 吉岡 郷甫 「代名詞」『文語口語対照語法』 光風館書店
- 1913 芳賀 矢一 「代名詞」『口語文典大要』 文昌閣
- 1915 落合 直文 「代名詞」『普通文典』 修学堂
- 1916 大野 佐吉 「代名詞」『国定読本文語法と口語法』 目黒書店
- 1916 井上 宗助 「代名詞」『国定読本文語法と口語法』 目黒書店
- 1916 国語調査委員会 「代名詞」『口語法 全』 国定教科書共同販売所
- 1922 山田 孝雄 「代名詞」『日本文法講義』 宝文館
- 1922 山田 孝雄 「代名詞」『日本口語法講義』 宝文館

- 1922 小林 好日 「代名詞」『標準語法精説 全』 育英書院
- 1924 小林 好日 「代名詞」『新体国語法精説』 大同館
- 1926 三浦 圭三 「代名詞」『綜合日本文法講話』 啓文社書店
- 1928 安田喜代門 「代名詞」『国語法概説』 中興館
- 1929 徳田 浄 「代名詞」『新日本文法 上』 文献書院
- 1929 友納友次郎 「代名詞」『国語教育の基調として標準語法』 明治図書
- 1930 松下大三郎 「名詞（代名詞を含む）」『標準日本口語法』 中文館書店
- 1930 松下大三郎 「代名詞の小分」『改撰標準日本文法』 中文館
- 1931 木枝 増一 「代名詞」『高等口語法講義』 目黒書店
- 1931 湯沢幸吉郎 「代名詞」『解説日本文法』 大岡山書店
- 1931 橋本 進吉 「代名詞」『新文典 新制版 全』 富山房
- 1932 三矢 重松 「名詞・代名詞に就いて」『文法論と国語学』 中文館
- 1934 コイヤード 「代名詞に就いて」『日本語文典』 大塚高信訳 坂口書店
- 1936 佐久間 鼎 「代名詞の問題」ほか『現代日本語の表現と語法』 厚生閣
- 1940 佐藤喜代治 「代名詞」『日本口語法』（東方国民文庫20） 満日文化協会
- 1948 宮田 幸一 「代名詞」『日本語文法の輪郭』 三省堂
- 1951 佐久間 鼎 「代名詞の本領」ほか『現代日本語の表現と語法』《増補版》
厚生閣版
- 1952 千田 幸夫 「万葉語法研究——「この」「これ」について——」『文科報告』
1号 鹿児島大学文理学部研究紀要
- 1952 阪倉 篤義 「代名詞」『日本文法の話』 創元社
- 1952 渡辺 実 「指示の言葉」『女子大文学』（大阪女子大学文学会）第5号
- 1955 三上 章 「代名詞と承前詞——指示のはたらき」『現代語法新説』 刀江書院
- 1955 森重 敏 「代名詞「し」について」『万葉』16 万葉学会
- 1955 井手 至 「文脈指示語に対する漢文訓読の影響」『国語学』22 国語学会
- 1956 桜井 光昭 「源氏物語における「こ」の用例」『解釈』2—1号 解釈学会
- 1956 石田 精二 「あこからそこから」『国語研究』22号 愛媛国語研究会
- 1956 保坂 弘司 「源氏物語の一語法——解釈学への一つの提言と示唆」『学苑』
195号 昭和女子大学近代文化研究所
- 1956 高橋 太郎 「「場面」と「場」」『国語国文』25—9号 京都大学文学部国語学
国文学研究室
- 1956 三宅 武郎 「問答の二重構造——日本語における指詞（コソア）の用法につ
いて——」『国語研究』5号 国学院大学国語研究会
- 1957 今石 光美 「コ・ソ・ア・ド体系のことば」『学校教育』475号 広島大学付

- 属小学校教育研究会
- 1957 細川 浩一 「子どもの指示語の理解」『国語科教育』第4集 東京学芸大学
国語教育研究室内全国大学国語教育学会
- 1957 古田 東朔 「代名詞遠称「あ」系語と「か」系語の差異」『文芸と思想』14号
福岡女子大学文学部
- 1957 柴田 武 「格・人称」『日本文法講座1 総論』明治書院
- 1958 井手 至 「代名詞」『続日本文法講座1 文法各論編』明治書院
- 1958 Miyake,
Takeo 「「こ・あ」と「こ・そ・あ」——さすことば（指詞）の体系」
『実践国語教育』19—217号 実践国語教育研究所
- 1958 Miyake,
Takeo 「「ど」はどこにあるか——さすことば（指詞）の体系 その2
——」『実践国語教育』19—218号 実践国語教育研究所
- 1959 Miyake,
Takeo 「「それ」とは何か——指詞の日英比較文法」『実践国語教育』20
—219号 実践国語教育研究所
- 1959 清水 功 「いわゆる遠称の指示語の一特殊用法について——平家物語の用
例より遡って——」『名古屋大学国語国文学』2号
- 1959 さねとう
けいしゅう 「KO SO A DO」『IZUMI』36gō 熊本大学医学部生理学教室内
いずみ会
- 1961 服部 四郎 「「コレ」「ソレ」「アレ」と this, that」『英語青年』107—8号
研究社
- 1961 空西 哲郎 「人称と「話の場」」『英語青年』107—11号 研究社
- 1961 宮田 幸一 「日本語と英語の指示詞——服部四郎氏の考察を読んで——」
『英語青年』107—11号 研究社
- 1962 サクマカナエ 「コソアドの生いたち」『文学論藻』23号 東洋大学文学部紀
要国文学篇
- 1963 時枝 誠記 「代名詞(一), (二)」『日本文法 口語篇』岩波書店
- 1964 宮地 敦子 「代名詞」『講座現代語6 口語文法の問題点』明治書院
- 1966 橋本 四郎 「古代語の指示体系——上代を中心に——」『国語国文』35—6
号 京都大学文学部国語学国文学研究室
- 1966 浜田 敦 「指示詞——朝鮮資料を手がかりに——」『国語国文』35—6号
京都大学文学部国語学国文学研究室
- 1966 松原 純一 「代名詞ソレにおける文脈指示の内容の文法的分類」『国語研究
室』5号 東京大学文学部国語研究室
- 1967 後藤 和彦 「古代国語の指示代名詞について」『国語国文』36—10号 京都
大学文学部国語学国文学研究室
- 1967 池上 秋彦 「代名詞とは何か」『講座日本語の文法3 品詞各論』明治書院

- 1968 服部 四郎 「コレ、ソレ、アレと this, that」『英語基礎語彙の研究』三省堂
- 1968 清水 功 「謡曲の指示語について——場面と様式——」『名古屋大学 国語国文学』23 名古屋大学国語国文学会
- 1969 松原 純一 「ソナとソウの文脈指示の内容」『国語と国文学』67 東京大学国語国文学会
- 1969 大坪 併治 「提示語法について——訓点資料と今昔物語を中心に」『佐伯梅友博士古稀記念国語学論集』佐伯梅友博士古稀記念国語学論集刊行会
- 1969 清水 功 「指示語についての一考察」『研究紀要』2 豊田工業高等専門学校
- 1971 阪田 雪子 「指示語「コ・ソ・ア」の機能について」『東京外国語大学論集』21
- 1971 鈴木 忍 「コソアドについて」『外国人のための基本語用例辞典』付録文化庁
- 1972 林 四郎 「指示連体詞「この」「その」の働きと前後関係」『電子計算機による国語研究4』国立国語研究所
- 1972 岡村 和江 「代名詞とは何か」『品詞別日本文法講座2 名詞・代名詞』明治書院
- 1973 片岡 了 「コ・ソ・カ変遷の一面」『文芸論叢』1 大谷大学文芸研究会
- 1973 清水 功 「平家物語における指示語の特殊用法について——指示体系の変遷に関連して」『平家物語総索引』金田一春彦・清水 功・近藤政美編 学習研究社
- 1973 久野 瞳 「文脈の分析——「コ・ソ・ア」」『日本文法研究』大修館
- 1974 長田 久男 「連文の諸相(1)——コ・ソ・ア系統の指示詞による意味の持ち込みという現象——」『岡山大学教育学部研究集録』38
- 1974 清水 功 「いわゆる副詞的指示語「か」「さ」について——指示体系変遷の考察の一環として——」『椋山女学園大学研究論集』5
- 1974 大野美江子 「指示語の働きとその指示先決定の問題」『計量国語学』71号 計量国語学会
- 1975 高橋 太郎 「コソアドの原理について」『言語生活』280 筑摩書房
- 1975 山元 有美 「指示語彙と指示機能——分布の実態と史的展望」『王朝』第8冊 王朝文学協会
- 1975 HINDS, John 「Interjective demonstratives in Japanese.」『Descriptive and Applied Linguistics』Vol. 8 聖心女子大学

- 1976 井上 継護 「「こ・そ・あ」について」『研修』179号 海外技術者研修協会
- 1976 三宅 鴻 「代名詞的表現」『日本語講座4 日本語の語彙と表現』鈴木孝夫編 大修館
- 1978 堀口 和吉 「指示語「コ・ソ・ア」考」『論集日本文学・日本語』5 角川書店
- 1978 堀口 和吉 「指示語の表現性」『日本語・日本文化』8 大阪外国語大学 研究留学生別科
- 1979 野入 逸彦 「Hier・dort・da と「ここ・そこ・あそこ」『人文研究』第31巻 第3分冊 大阪市立大学文学部
- 1979 今井 四郎 「指示代名詞の指示機能について」『北海道大学人文科学論集』15
- 1979 黒田 成幸 「(コ)・ソ・アについて」『英語と日本語と』くろしお出版
- 1980 古田 東朔 「コソアド研究の流れ(-)」『人文科学科紀要』第71輯 国文学・漢文学XX 東京大学教養学部
- 1980 桃内 佳雄 「「その」に関する二、三の考察」『計量国語学』第12巻第4号 計量国語学会
- 1980 柴田 武 「ことばにおける構造とは何か」『言語の構造』大修館

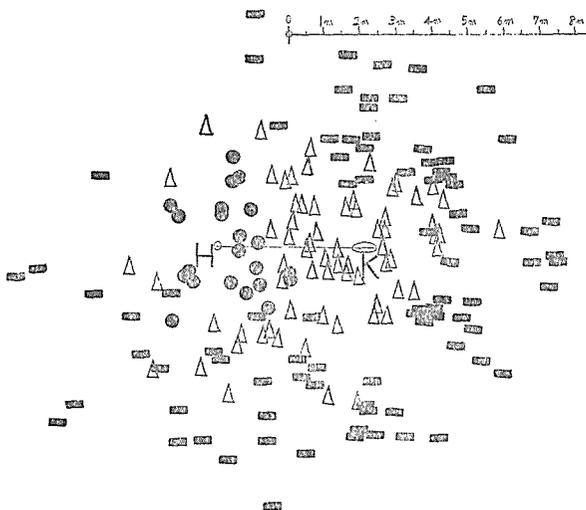
付記1：今回の実験において、コ・ソ・アのはりあい関係のありかたを二元的にとらえざるを得ない結果を得たのだが、これが従来のとらえかたのまちがっていたことを意味するのか、または、コ・ソ・アのはりあい関係の現在かわりつつあることを意味するのか、今のところ、よくわからない。諸賢の実証的な研究によって、この問題が解明されることをのぞみたい。
(高橋)

2：論文作成後、別の被験者に対して、実験イと同じ方法でコソアドの指示領域をしらべたところ、第17、18図のような結果を得た。

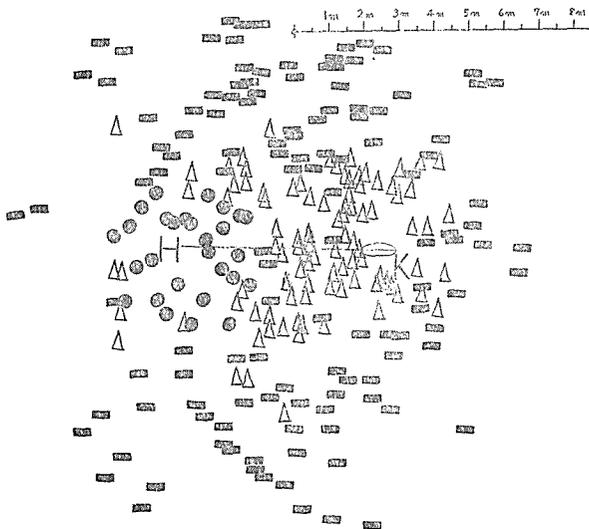
この実験も実験イにみられたものと基本的には同じ結果が得られた。第17図は第9図6、第18図は第9図7に相当するものである。

3：この論文を提出したあとで、古田東朔氏から「コソアド研究の流れ(-)」(東京大学教養学部編人文科学科紀要第17輯1980年3月発行)をおくっていただいた。そこでは、江戸期の国学者、洋学者の文法書にさかのぼり、くわしくしらべられている。

第17図 H-K : 4~4.4m, 12人



第18図 H-K : 5.1~5.9m, 16人



また、コソアド研究を人称という観点から解釈を与えたものとしてアストンやチェンバレンを位置づけ、日本文法研究史の中で比較的扱われることが少なかったそれら外国人たちの日本文法研究についても、文語文典、口語文典をくらべ、史的な観点からの考察をされている。

私たちの研究では、そこまでさかのぼることができず、またアストンやチェンバレンの版ごとのちがいをみることができなかつたので、教えられるところが多い。